

友の会だより 7号

都歴研友の会事務局 〒191-0033 東京都日野市百草971-158 増田方
 電話・FAX 042-591-1853 ホームページ <http://sky.geocities.jp/torekikentomonokai>

友の会海外研修 **中欧の旅** 《前編》チェコからスロバキアへ

ボヘミアの森とブルダヴァの流れ

村木逸子

中欧ヨーロッパへの旅はハプスブルグ帝国への旅、もう一つは中欧ヨーロッパの20世紀の歴史を学ぶ旅であった。事前に何冊かのテキストを紹介したが特に強調したのが「エリザベートーハプスブルグ家最後の皇女」であった。その理由は、皇女の生きた時代の中欧の激しい歴史の展開、すなわち王朝と多民族国家の崩壊、台頭してきた社会主義勢力、ヒトラーの時代、社会主義化など>がきわめて具体的に語られているからであった。実際に現地に行きガイドの説明を聞くと、社会主義国家時代の悲惨さなど語られることが多くあり、まさに現代史を知る旅であった。

田園風景の中の「三圃制農業」

2012年10月31日、ウィーンの朝は雪景色であった。成田からウィーンに着いて1泊、翌11月1日は直ぐにチェコ共和国のチェスキークルムロフに向かう。眼前に展開する景色は秋から冬へ、雪は少しずつ溶けて秋色の畑がみえる(写真次ページ)。左右に広がる風景は本当に美しかった。ヨーロッパ社会が経済的に安定するのは12世紀頃から「三圃制農業」や有輪犁の利用による、と歴史の授業では教えてきた。それを思い出させるような風景である。この風景は後にチェコやハンガリ



チェスキークルムロフ城

一の田園風景を見たときに極めて対照的であることに気付かされた。社会主義の経済を経験した国では農地は国有化、共同化されたのでまったく囲いのない平坦な(だだっ広い)農地になっている。どちらが風景として美しいかと聞かれれば当然オーストリアの村の風景である。教会を中心に集落があり暮らしが想像できる。

～主な内容～

中欧の旅	チェコからスロバキアへ	村木逸子 1
	ハンガリーからオーストリアへ	矢島恒之 11
全歴研大会報告(村木)	17	都歴研講演会(豊田) 19
都歴研講演会(小澤)	20	都定通研の思い出(多田) 23
川越研修の記		小澤拓美 21
友の会国内旅行「日光」ご案内	24	
会員の著書紹介	24	友の会総会報告 24



右手にかなり大きな建物がみえた。バーベンベルク家の城のあったところで王家はその後ウィーンに居を移し、しばらくは**イエズス会の修道院**であったという。現在は図書館と古文書館を兼ねたような立派な施設である。



眼前に展開される風景の美しさに感嘆の声をあげながらも道路標識が気になる。前方には何度も **Linz** の文字が見える。

1938 年、アドルフ・ヒットラーはオーストリアを併合するにあたり、まず自分の故郷であり学校のあった **Linz** に立ち寄り、それからウィーンに進軍した。この道路は、かつて不遇な青春時代をおくったウィーンへ、ヒットラーが勝利者として凱旋した道だったのではなかろうか。

オーストリアからチェコへの国境を越えるときには歴史の転換した事実を痛感した。チェコが社会主義国であった時代には国境を越えることは様々な緊張を強いられた。国境には鉄条網が巡らされ、高圧電流が通っているといわれていたのである。ところが、今はいとも簡単に「皆さん、ここが国境検問所のあったところですよ」とバスが止まることもなく通過したのである。隔世の感ありとはこのようなこと！

チェコに入ると景色が少し変わる。素気ない高層住宅が建っている。森林はあまり管理されてい



ない。道路からも見えるところに**池がよくみえる**。鯉の養魚場である。クリスマスに、ヨーロッパの人々は南のイタリアなどでは「ウナギ」を食べる。チェコなどの内陸諸国では「鯉」を食べるそうである。それゆえ中世以来鯉の養殖は重要な産業であった。貴族の支配の強い時代には池の管理権は貴族に握られていたそうである。ブルダヴァ川から水をひき、城の周辺に人造の池や湖をつくり、鯉を養殖し重要な財源としたそうである。チェコ全体で人造湖や池は 2 万 2000 もあるそうだ。社会主義時代には国営化されたであろうが、現在はどうなっているのでしょうか。そうこうしているうちにチェコ南西部にあるチェスキークロムロフに着いた。

「宝石のような街」悲劇の歴史

チェスキークロムロフは、ブルダヴァ川が大きく蛇行したところに位置する中世の面影が色濃く残るチェコ観光で大人気の都市である。まず旧市街の広場に向かう。広場の周辺にはこの地を支配した歴代の貴族の家の紋章が描かれ、広場の中央には 1680 年のペスト記念碑、マリア像、そしてフス像があった。フスはチェコ民族の英雄である（1369 年～1415 年）。ルターの宗教改革より前にローマ教会の教えに異議を唱え、それゆえにコンスタンツの宗教会議にて火あぶりの刑に処せられた。プラハ大学の総長でもあったフスはプラハとチェコの偉大なる知識人である。苦難の歴史のなかでチェコ民族を支えてきた、民族の象徴のよう

「宝石のような街」チェスキークルムロフ



な人物である。きっとどこの都市でもフスの像があるのだろう。

13世紀頃、この地にヴィートコフ家が築いた要塞がチェスキークルムロフ城の起源であるが、14世紀に五枚の赤いバラの花びらを紋章とするロジエンベルク家に移り、その支配が長く続き繁栄した。この貴族は中世にチェコで最大の勢力を誇った貴族で、カレル4世も一目を置いたそうである。特にボヘミア王国の宰相になった16世紀がこの都市が最も栄えた時代で、各地から学者や芸術家が訪れたという。近隣に銀山や塩の鉱山があり商業や手工業で栄えたが、城の持ち主は17世紀には別の貴族になった。

昼食後、川に囲まれた天然の要塞となっている城の中の建物や中庭などを見て回る。塔に登る人もいた。ゴシック様式に始まりルネサンス様式、バロック様式など流行の建築様式を取り入れ増改築されている。「だまし絵」技法(?)が人気だった。実際には石を積んではいないのに絵を描いて古い石が積まれたように見せ、窓があるように見える。城から見下ろす市街地の屋根は同色に統一され、自然の景観も素晴らしくよい。この観光地が人気の観光地になる所以である。

しかし、19世紀末から20世紀にかけて活躍したエゴン・シーレはこの地を「死の町」と呼んだ。民家の屋根は抜けおちんばかりで廃墟のような町であったという。産業革命・鉄道開発の時代の流れからは遠のいていたのであろう。社会主義時代も全く有名な都市ではなかった。それが、1960年代頃から、その古さが注目されるようになり町の保存が始まった。ビロード革命後の1992年に

世界遺産に指定されると、素早く「お化粧直し」をしてチェコの代表的な観光地としてデビューしたという。東欧革命後観光地として世界に美しい中世の街の姿を見せたのが、ここチェスキークルムロフとクロアチアのドブロボニクである。

今回の旅で、「もうひとつのチェスキークルムロフ」については全く触れられなかった。実はチェコの国境地帯は、中世はドイツ人の植民が積極的におこなわれたところで歴史的にはドイツ系住民が多くドイツの文化が強いところであった。チェスキークルムロフもその中の都市のひとつで、長い間ドイツ風に「クルマウ」と呼ばれてきた。城主はロジエンベルクではなくローゼンベルクである。19世紀後半から民族運動が盛んになり第一次大戦後チェコが独立すると町の名を現在のチェスキークルムロフというチェコ語にかえた。新しいチェコスロヴァキア共和国ではドイツ人の地位が従来より低くなり不満が高まった。そこに乗じて「ズデーテン地方の合併」を主張したのがヒトラーである。1938年、ズデーテン地方の併合、翌年のチェコスロヴァキア解体と続く。

第二次大戦が終わると今度はチェコ人の反撃が始まる。チェコスロヴァキア領内に住むドイツ人は、それが中世以来そこに住んでいたドイツ人であっても全てのドイツ人が財産を没収され国外に追放された。チェスキークルムロフはドイツ人の多い都市であったためほとんど無人状態になり荒廃していった。今は<宝石のような>とか、<おとぎの国のような>といわれ輝いているこの都市を巡る憎悪と悲劇と戦いの歴史も忘れてはならない。過去のいきさつは語らずチェコは自分たち民族の歴史としてのみ語るものであろうか。町の広場に面したレストランでチェコ名物「クネドリーキー」に出会う。チェコの小説の「兵士シュベイクの物語」によくこの食べ物が出てくるので、一体どのようなものなのか、興味津々だった。作り方は小麦とイーストをまぜてこね、太い棒状にしてゆでて、それを2〜3センチの厚さに切ったもので、ソースなどを絡めて食べる。チェコ民族の「おふくろの味」なのでしょう。後にプラハに

行ったときも出された。お味は？ ビールはチェコの特産品で、プルゼニュ（ピルゼン）産タイプとブドワール（ブドワイズ）産タイプの二通りがあり世界的に有名である。後者の名称はアメリカでは「バドワイザー」となって本家本元と商標をめぐる争いが続いているという。

プラハ城からカレル橋へ散策

1月2日、朝早く先ずプラハ城に行く。雨が降り始め傘をかぶっての見学となった。途中の建物にラクガキがかなりあり、期待していただけに少々がっかり。案内は在プラハ数十年の佐藤さん。裏門から入り城内の建物の説明をしてくれた。チェコやプラハが好きで住んでいるはずなのに、どうもチェコ人への評価はよろしくない、いい加減な人たちだという。そうはいっても雨のなか瞬きもせず衛兵は立っていました（写真下）。一緒に記念写真まで撮らせてくれてずいぶんとサービスがよい。最近では人気の職業でなるほどカッコイイ青年たちでした。

プラハ城というのは新旧宮殿、大聖堂、教会、中庭すべてを総称している。新宮殿は現在は大統領府、旧宮殿は大きな広間があって色々な行事が行われている。

プラハには歴史上3回の「窓からの突き落とし事件」があった。1回目は1419年、ヤン・フスが処刑されたのに怒ったフス信奉者たちがプラハの市庁舎に押し掛けて市議らを窓から投げ落とした事件である。ボヘミア国王バーツラフ4世はショックをうけて亡くなり、王位継承問題とフス派弾圧とが国内の対立を生み、フス戦争がおこるきっかけとなった事件である。2回目の事件の舞台がこの時歩いた城内の一角であった。1618年、3

人のハプスブルグ家の代官が、押し掛けたプロテスタント貴族たちに突き落とされた事件である。これが三十年戦争のきっかけとなった。3回目

は1948年、ヤン・マサリク外務大臣が自宅のある外務省のアパートの窓から転落し謎の死を遂げた事件である。ソ連によって閣僚が共産党員とされるなかでただ一人非共産党員だった人であり、自殺ではなく突き落とされたという見方もある。いずれもチェコの歴史にとって重要な分かれ目に起きた事件であるが、ガイドさんは面白おかしく述べていただけだった。3回目の事件のマサリクはチェコスロヴァキア初代の大統領マサリクの長男である。社会主義政権の時代は、建国の父マサリクの名を口にすることさえ憚れたという。父のマサリクの銅像（写真下）は2000年にこの広場に建てられた。今は堂々と立つチェコの英雄、ハンサムなマサリクに出会える。建物の角を曲がると目の前に「聖ヴィート大聖堂」（写真上）があった。



案内の佐藤さんは「お金がなくてまだ化粧直しができていない」と嘆いていたが確かに黒っぽい部分が多く残っている。聖堂を造らせたのはカレル4世、内戦やらなにやらで完成したのは1929年であるという。ゴシック様式で天井が高く、荘厳な教会である。入口近

プラハ城からカレル橋を望む



くに有名なステンドグラスがある。20世紀初頭の有名な画家ムハの作品だというのが、その部分の撮影は有料だった。この聖堂の遠方からの眺めはとにかく美しい。

小さなショップでお土産を買ったり、トイレを利用したりして坂道を下り「小市街」を通り、いよいよカレル橋である。プラハといえば「カレル橋」そのうえを歩ける日が来るとは想像もしていなかった。雨もあがり、橋の上を往来する人の数も多い。スリに注意するようにと強くいわれる。橋の長さ520m、幅10m、アーチは16、大きく重厚な橋であった。現在は使われていないが橋の出入り口にある門塔は通行税の徴収所、監視塔、牢獄、防衛線などの機能を持っていた。フス戦争といわれる新旧両勢力の宗教戦争はチェコで多くの犠牲者を出した。敗北したプロテスタント軍の首謀者たちが旧市街の広場で処刑され、その生首がこの塔に吊るされてみせしめにされたという血なまぐさい歴史もあった。結局、カトリックがチェコの宗教となったので橋の両側にはカトリックの聖人たちのオンパレードとなり総勢30人とのこと、一番の聖人は聖ネポメク、その台座の聖者の彫刻された部分にさわると願いがかなうといわれ、その部分がピカピカに光っていた。巣鴨のお地蔵さんに触るのと同じようなご利益があるそうで、私もそっと触ってきました。日本人におなじみのフランシスコ・ザビエルも聖人の一人としてあったが、ザビエルを担いでいる人の顔はどうみても日本ではなく中国人のようでした。

旧市街からカレル広場へ

橋を渡り終えたところに<カレル4世> (1346年～1378年在)の銅像(写真下)があった。チェコとプラハの歴史にとってこの王の存在は欠かせない。神聖ローマ皇帝カール4世でもある。ボヘミアの王家プシェミスル家が断絶したとき、オタカル2世の孫エリシュカの夫、ルクセンブルグ家



のヨハンが王位を継ぎ、その子供として生まれたのがカレルである。父親の考えで7歳の時からパリのカペー家で教育を受け、14歳でボヘミアに戻った。神聖ローマ皇帝として即位すると、プラハを帝国の都にすべく市街の拡張、ブルダヴァ川に橋をかけ、フランス風ゴシック建築の教会をつくり(代表が聖ヴィート教会)、聖バーツラフを祭る礼拝堂でボヘミア国王の戴冠式を

行なう伝統をつくり、大学(プラハ大学)を創設した。

プラハの町のあちこちでカレルの名を耳にする。母親の伝統であるボヘミア文化を引き継いでいたが、父親の出身であるドイツ人勢力を無視することはできなかった。

カレル橋から旧市街に向かう道の両側にはお店がビッシリ、人の波だった。あとでわかったことだが、この日は万聖節でヨーロッパの国の多くは休日、丁度三連休となり、観光客が押し寄せていた日だった。宝石を扱う立派なお店もあるが「この辺のお店の持ち主は実はロシア人です。店員さんなどは勿論チェコ人ですが、ロシアンマフィアが土地やお店を買い占めてしまった」と佐藤さんは教えてくれた。社会主義時代にチェコを抑圧していた憎きソ連と親ソ政権に変わって新しい国をつくったというのに・・・。



プラハ旧市街広場のヤン・フス像

こんどはロシアンマナーが入ってきたようで、自由化すればよいところ

ろもあれば、もっと激しい波に襲われることもある。時間は超スピードで動いている。

旧市庁舎と天文時計

旧市庁舎は何ともいえない造りである。その昔、1338 年と大変古い時代に市民たちが 1 軒の商家を買ってそれを市庁舎にしたそうである。都市として自治権を獲得したので間に合わせて購入したのであろう。その後買い足して広げていき、6 軒の商家を繋いで市庁舎とした。違う時代、違うスタイルや色、屋根の高さも違うという珍しい建物であるが妙に風格がある。その南面に天文時計がある（写真上左）。1490 年ごろ、時計職人ミクラージュ・カダニユによって造られた。からくり時計で、12 人の使徒が登場する仕組みになっている。15 世紀末に作られたと聞いてその技術力に驚く。12 時に近くなると集まってくる人の多いこと多いこと、誰もが上を見上げ次々に出てくる聖人たちを見て感動していた。

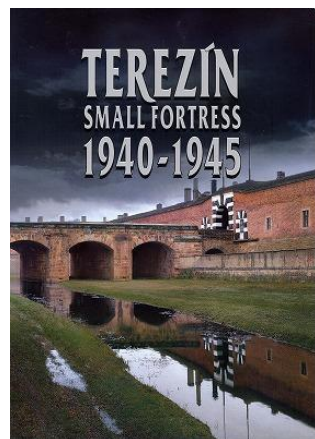
旧市街の中心にある広場には大きなヤン・フスの像（写真上右）がある。この広場の周囲に建物は分散してあるのが中央ヨーロッパで最も古い大学＜カレル大学＞である。歴史的な大事件や小説などによく出てくる有名な一角である。

昼食にはチェコのもう一つの有名な料理「グラーシュ」（スープ）が登場、クネドリキーも添えてあった。

ユダヤ人街とユダヤ人墓地

午後は自由時間だった。その広場からの西南の方角にあるユダヤ人の街に行った。地区の入口にカフカの胸像があった。カフカはこの地区に生まれたユダヤ人である。カフカの生まれた時代に、苦勞して生活の基盤を作った親の世代は子弟の教育に力をいれた。チェコが独立した時代ではあれ社会はハプスブルグ時代に公用語であったドイツ語で、ユダヤ人子弟はドイツ語の学校へ行くケースが多かったそうである。そこでカフカはドイツ語で小説を書いたためドイツ人と思われていた。カフカの胸像は 1960 年代にチェコでカフカの評価がされた時代にとりつけられたものであるという。

シナゴグに入るのは初めてである。まず「ピンカスシナゴグ」に入った。内部は古く、階段をのぼって部屋に入ろうとすると壁面は黒と赤の点がしきつめられたような模様がある。変わったところだと思い近づくと思模様に見えたのはそこに人の名前、チェコスロヴァキアの地名がかかれたものであった（写真次ページ上左）。それは第二次大戦でホロコーストの犠牲になった 8 万人のユダヤ人の名前であった。カフカの妹たち、元アメリカ国務長官オルブライトさんの祖父母の名もあるという。アルファベット順に実名で家族ごとに居住地も記されていた。一人ひとりの生命と人間



性を尊重するために実名にしたという。自由な風潮が広がった 1960 年に公開されたが、建物が傷んでいたため修理を始めたところ 1968 年の「プラハの春」で閉鎖されたままになってしまった。その後、壁の碑名も傷みが進んでしまったがビロード革命後修理が再開され 1992 年から公開されるようになったという。

階上には多くの遺品や強制収容所で子どもたちの描いた絵画なども展示されていた。**チェコスロヴァキアのユダヤ人は一旦「テレジン強制収容所」(写真上右)に送られ、その後アウシュビッツへ送られたという。**1 万 5000 人のユダヤの子供たちは親から引き離され性別に収容された。自由な世界を夢見て描いた絵がこのシナゴグの展示会場にあった絵である。

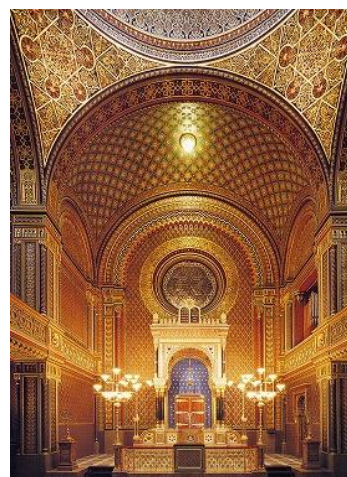
シナゴグの脇に(シナゴグの方が後の建造らしいが)**ユダヤ人墓地(写真上中)**があった。ユダヤ人は中世以来この地域に閉じ込められて埋葬されたため、墓石は 1 万 2000 もあり、1787 年までに約 12 万人が 12 層に折り重なって埋葬されていたという。

続いて「旧新シナゴグ」に入る。プラハにユダヤ人が住み始めたのは 10 世紀中ごろにさかのぼるという。1254 年、ボヘミアの国王ブシャミスル・オタカル 2 世は「ユダヤ法」を發布し、ボヘミア地方のユダヤ人に、居住地や共同墓地やシナゴグを保護するとした。多くのユダヤ人が集まってきてシナゴグも新しくつくられたため<新シナゴグ>と名づけられた。とはいえ今では古い時代のものなので頭に旧がついたらしい。少し

変わった名称の由来である。

シナゴグ入口は 13 世紀末頃のもの、二廊式の本堂はこのような建築様式のシナゴグでは最も古いものであるという。この地区に沿って「通称パリ通り」と呼ばれる繁華街は、もともとはユダヤ人が多く住んでいたところで、自由な通行をゆるされたユダヤ人たちがもっとも活気ある生活を送ったところであった。彼らの新生チェコスロヴァキアへの貢献度も高かったという。強制収容所に送られるとき、彼らが歌ったのはチェコスロヴァキアの国歌であり、意識としてはチェコスロヴァキア人であったというが、ナチスはユダヤ人として抹殺したのである。

最も新しいシナゴグは「**スペインシナゴグ**」という。西側正面はムーア様式、内部の装飾はアラベスク模様とのこと、スペインのアルハンブラ宮殿の模様などが用いられているという。イスラムの時代には共存していたユダヤ教徒をキリスト教勢力はイベリア半島から追放した。セファルディームと云われる彼らは各地に分散した。プラハにあるシナゴグがアルハンブラ宮殿とどのような関係があるのか知ることが残念ながら時間切れで実際の場所を見ることはできなかった。



ナチス以前のユダヤ人共同体が残っているのは大変珍しい。ヨーロッパのユダヤ人共同体を根こそぎ破壊し、多くの尊い命を奪ったナチスの政策をプラハの町で体験できたことは今回の旅のなかの最も心に残ることであった。

プラハでのショッピング

旧市庁舎広場に面した高級お土産物店を起点に自由行動の後半はショッピングとなった。ヴェネチアから学んでクリスタルグラスなどの技術を開発し高級ブランドとなったボヘミアングラスであるがグラスなどは持ち帰るのが難しい。女性に人気でお土産としてかさばらないものは「深紅のザクロ石・ガーネット」であるという。でも高級品である。商店街を歩き回り「マリオネット人形」などをお土産とした。更に、共和国広場にある「ハベル市場」へ。食品類の店が多いが数多く露天が出ている。変わったものも売っているので見るに飽きない。「くるみ割り」を私は買った。

再集合して夕飯へ。アメリカ風居酒屋？とでもいおうか若い人の多い都会のレストランであった。素朴というか、**ジャガイモとサツマイモがどんと出てきた。鶏肉の玉ねぎ添えとともに。**これが普通の人の食事なのかもしれない。観光客相手のお店は食べ物も豊かな雰囲気ですが、庶民の暮らしはまだまだ楽ではないのでしょう。

翌日の朝スーパーマーケットの前の露店で帽子を買った。アジア系の人である。聞くと「ヴェトナム人」であるという。チェコが社会主義の時代に社会主義国間の交流で研修労働者が多く来ていた。チェコの民主化でヴェトナムに帰国したが、続々と戻ってきているという。チェコ語を話せ、様子を知っているのでこちらに出店する方がよくて衣料品関係の店を出すヴェトナム人が多いという。値段が安く品質もまあまあで繁盛しているそうである。私の買った帽子もそのような逸品である。

プラチスラヴァ城からドナウ川を望む



チェコからスロヴァキアへ向かう

11月3日、プラハとはお別れ、ホテルの朝食は豊かであった。ホテルの居住空間もよし。ホテルの近くにスーパーマーケットもあり、買い物に行った方も多い。

チェコより南東に位置するスロヴァキアに向かうのだがチェコ国境まではかなり距離がある。まっすぐ東へ向かう途中で皆気づいたが周辺の田園風景がなんとも単調である。集落も見えない、全く人影もない。なぜだろう？・・・思い当たるのは「社会主義・集団農場」である。土地所有について調べてみると、チェコスロヴァキアは第二次大戦後小農民育成の方針を採ったが共産党が政権を握るとただちに農地を集団化した。ソ連式の集団農場、共同農場に編成され農民は「農業労働者」になった。集団化はそれまでの農地の柵を全て撤去し、大きな農機具が耕作や播種などをこなした。「ビロード革命」によって集団農場は分割されたが、効率性からいうと大農場の方がよいと味も素っ気もない広大な農地の姿のままになったのだそう。日本の、小農民中心の小さな田んぼや畑の姿に慣れている私達にはあまり愛せない田園風景だった。

バスはモラヴィア地方中心の**ブルノ**を通り過ぎる。ブルノの南で生まれたのがムハ（フランス名ミーシャ）である。彼はパリで活動したためフランス人と思われているが、作品のなかには大作「スラブ民族叙事詩」もあり、故郷チェコスロヴァキ

アをこよなく愛していたそうである。ムハは 1939 年、ドイツ軍の尋問を受け体調を崩し、その後まもなく亡くなった。現在、彼はチェコ民族の誇りとなっている

ブルノの「聖マリア被昇天教会」に付属する僧院につとめていたのがメンデル、あのメンデルの遺伝の法則を発見した僧であるとツアーデレクターの島さんの解説が続く。

ナポレオンが遠征しオーストリア、ロシア、プロイセンと戦った「アウステルリッツの三帝会戦」の原野がこのあたりであると説明される。アウステルリッツはドイツ名でチェコ名ではスラフコフ、その丘の上には「ナポレオン博物館」があり、フランス人観光客がよく訪れるという。まもなく国境である。またも簡単に通過。

未知の都市ブラチスラヴァ

1993 年、チェコスロヴァキアからスロヴァキアが分離して共和国となり、その首都がブラチスラヴァである。今回の「中欧 4 カ国周遊の旅」の 4 つの首都のひとつであるが、全く何も知識がない。申し訳ないなと思いつつドナウ川 (P8 写真) に面した町に降り立つ。最初に会ったのが「マンホルの男」(正式には<覗く人>写真下)そして「パパラッチ」(写真右)、これでこの町の印象ができた。なんとひょうきんな国かと。民族の魂を胸にドイツやソ連と戦い・・・といったチェコのようなタフな国民性ではないのであろうと。だから簡単にナチスドイツの傀儡国家になってしまったのか？ 旧市街の中央広場に立っている旧市庁舎が街のシンボルである。

プラハの旧市庁舎と同様 14 世紀以来隣接の建物を買い足したり増築したりして様々な建築様式が複合した建物になっていた。現在の市庁舎は 2011 年に新しく造られたそうで、この建物は現在は博物館になっているという。塔の壁面に残る黒い玉は 1809 年にナポレオン軍が撃ち込んだものだそうだ。ナポレオンがブラチスラヴァにまで来ていたとは知らなかった。それにしても残しておく意味があるのだろうか？時計塔には登れるよう

になっているそうだ。

ピンクの壁面の立派な建物があつた。これはもともとは大司教の住まいで、オスマントルコに占領されたエステルゴムから逃げてきた大司教が建てさせたもので、その後ハンガリー王の戴冠式が行われたり、国王の宿泊所になったそうだ。18 世紀の終わりに建て替えられて今日の美しい建物になったそうです。1903 年に大司教から市が買い取って市庁舎の一部にしたり、現在は博物館として「国賓室」や「条約調印の鏡の間」などが公開されているという。事前にそのようなことがわかっていれば見学できたのに・・・と悔やまれる。

ここでブラチスラヴァの歴史についてひと言。市の歴史はケルト文明から始まり、ローマ帝国の国境警備の軍隊が置かれ、その後、ゲルマン・スラブなどの移動・定住があり、12 世紀には Bresuburug という名称がつかわれたという。東からのマジャールの侵入があり、13 世紀にはモンゴルの侵入を撃退するなどの歴史がある。15 世紀にハプスブルグ王朝がボヘミア、スロヴァキア、ハンガリーを治めるようになると、王により都市の自治も認められ商業・文化都市として繁栄した。

1526 年の「モハッチの戦い」で敗れたハンガリーは首都ブダも含めてトルコの支配下におかれたため、ハンガリー王室とハンガリー議会は 1536 年にブラチスラヴァ (プレスブルグ) に移動し、同時に貴族や大司教も移り住み、王都としても繁栄していった。18 世紀、マリア・テレジアはハンガリー王としてこの地に滞在することも多かったそうである。その後オスマン帝国が後退しブダを取り返すと、1783 年ヨーゼフ 2 世がハンガリーの首都をブダに戻した。歴史の過程でブラチスラヴァが王都であったのは 1536 年～1783 年、250 年余と





ブラチスラヴァ王宮

る。この間はハプスブルグ王朝の支配ゆえにドイツ語がメインの言語、次がハンガリー語、三番目にスロヴァキア語がつかわれていた。そこで都市名はドイツ語で表現するブレスブルクだったが、1918年に独立しチェコとともに「チェコスロヴァキア共和国」となった時に都市名もスロヴァキア風に「ブラチスラヴァ」となった。第二次大戦ではチェコと分離されドイツの傀儡政権がスロヴァキアに立ち、これがスロヴァキア民族の国家の最初であり、1993年に成立したスロヴァキアは2回目、いずれも首都はブラチスラヴァに置かれた。

旧市街には国王戴冠式の際の**パレードの道**（道路に王冠のプレートが今も残る）とか「ハンガリー議会」のあった建物などの説明があったが、あまり理解できていなかった。市内を歩いているときに見え隠れしていたのが「**聖マルチン教会の塔**」で、教会ではハンガリー国王戴冠式が行われていた。市内の各所に音楽家に関係するレリーフなどがあった。ハイドン、モーツアルト、ベートーベン、リスト、バルトークなどが訪れたと。それはブラチスラヴァにハンガリーの首都がおかれた時代のことで、貴族の館や聖マルチン教会（写真上左）などに音楽家が招かれ演奏会をしたからだった。この時代にブレスブルクは華やかな宮廷時代を生み出していたのであろう。

最後に小高い場所にある「**王宮**」を見に行った。プラハの古い王宮を見てきた目にはブラチスラヴァの王宮は「真っ白な新しい建物」でこれが王宮であるとは思えなかった。そこの売店で買った案内書を読むと、ナポレオン軍の攻撃には持ちこたえたものの1811年に失火により王宮もその周辺

も灰燼に帰し、以後再建もされず廃墟になっていたが、150年を経て社会主義時代に再建が決まり1953年に建設が始まって新たに造られたものであるという。社会主義の時代は大きな建物を素気なく建造するのが得意だったからだろうか、あのような「真っ白に光り輝く王宮」となったのは！。城の歴史は古く要塞として重要な役割を果たし、15世紀に皇帝の居城として整備された時代のものを参考にしてしているそうであるが・・・。

マリアテレジアは、この場所からブラチスラヴァの市街を見下ろしていたのであろう、などと想像した。市内にはもうひとつグラサルコヴィッチという名の宮殿があった。宮殿は大貴族のグラサルコヴィッチ伯爵の邸宅で伯爵はハンガリー議会の議長で、マリアテレジアの相談役でもあったそうだ。この建物は現在は大統領公邸になっている。

スロヴァキアやブラチスラヴァについては宮殿の売店で売っていた日本語の観光案内の本によって理解できた部分が多い。日本語の観光案内書があるということは観光客のなかで日本人の訪れる率が高いにちがいない。

今回の旅ではドナウ川に初めて出会ったのはこのブラチスラヴァであった。この都市が貿易港の役割を果たしているのはドナウ川の水運である。黄色く色づいた公園の樹木とドナウの眺めは大変美しかった。全体として「若い力」を感じさせられたのがブラチスラヴァであった。スロヴァキアの歴史は確かにチェコとは異なる。ハンガリーの文化の影響のほうが強いのであろう。ブタペストでは夜景をみたが、ここの夜景を絵葉書で見ると・・・ブタペストに似ている。



友の会海外研修 **中欧の旅** 《後編》ハンガリーからオーストリアへ

夕日かがやく草原の旅

矢 島 恒 之

都歴研友の会の中欧四ヵ国海外研修は、旅行社の企画にのった一般募集の海外研修だったが、当初に心配したトラブルもなく楽しい旅行になった。

ブダペストの音楽と夜景と

ハンガリーは、私が初めて行く国で、どのような国か期待していたところである。11月2日の午後にスロバキア的首都ブラチスラバを発って、ブダペストに着いたときには午後6時をまわっていた。地下室をリフォームしたレストランで、夕食を食べた。煉瓦の壁をもちアーチで天井を支えた、しゃれて落ちついた雰囲気のレストランである。昔の石炭置き場であった地下室をリフォームして様々な用途で用いることは、ハンガリーでは一般的なようだと言導氏が説明してくれた。



レストランでの夕食のときギター、バイオリン、アコーディオンをもった流しがきて、いろいろな曲を演奏して食事の場を楽しませてくれた。彼らの演奏を聴きながら、反ソ運動とそのシンボルとなった曲などについて、小澤さんがいろいろと蘊蓄のあるところを披露してくれた。私は、ハンガリーの「反ソ運動のシンボルとなった曲」については知らないが、チェコの「プラハの春」では、マルタ・クビショヴァーが歌ったビートルズの曲「ヘイ・ジュード」は、有名である。

夕食後のドナウ川クルージングで乗った船は、墨田川の水バスよりも少し大きい船で、船室の屋上は展望台になっている。船は私たちの貸切である。ドナウ川は、水源の標高678メートル、川の延長が2,680キロメートルという穏やかな大河で、さらに、今年も水不足で水位が下がっていることもあって、ゆったりした流れにのったブダペストの夜景を楽しむ絶好の機会を提供してくれた。

ブダの王宮の丘からの眺め

翌3日、見所のひとつであるブダ王宮は、20世紀初めに元のバロック様式の王宮が再建されて間もなく、二度にわたる世界大戦で再度破壊されたもの。今ある王宮は、1950年代に修復され



たものである。王宮近くにある王宮劇場前の広場は、社会主義時代に地下の遺跡の上に駐車場用に舗装されたところで、現在、発掘調査をしている（写真上左）と説明された。なぜ社会主義政権が王宮を再建し、地下の遺跡を破壊したのか。この相反する出来事の整合性が、私は未だに納得できないでいる。

同様の疑問は、第二次世界大戦当時の軍関係の建物が、戦争当時の砲爆撃のあとを残したまま建っていた（写真上中）ことにも感じた。第二次世界大戦の末期に、バラトン湖周辺にあるハンガリー油田の死守につとめるドイツ軍とこれを攻撃するソ連軍とで、ブダペストは、ブダの丘陵地帯——王宮の丘など——も市街戦の戦場となり破壊された。第二次世界大戦当時の軍関係の建物が、戦争当時の砲爆撃のあとを残したまま残しているのは、このブダペスト攻防戦の記念碑のつもりなのだろうか。

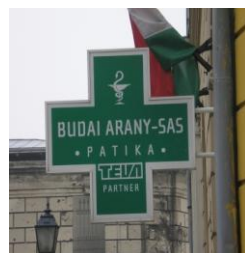
ブダ王宮の正門前の丘の下にある「鎖橋」は、ブダペスト見学中に何度も渡った。ブダ王宮見学の時霧が深く、残念ながら橋や対岸のペスト地区はよく見えなかった。この鎖橋を見下ろす位置にケーブルカーがあり（写真上左）、鎖橋のところからまっすぐ登ってこられる。王宮の丘に勤め先のある人は、このケーブルカーを利用するという。鎖橋の袂にあるアダムクラーク広場はハンガリー国内の道路の起点で、道路元票が設置されている。これは、東京の日本橋が日本の国道の元標所在地であることと同じであろう。

王宮の丘一带は、居住者のための駐車場が少ない。地元住民所有の自動車は、それを示すシールを貼って路上駐車をすることが認められていると、

ガイド氏が説明してくれた。

マーチャーシュ教会に向かう道端に、「蛇」のマークがついた薬局の看板がかかっていた（写真下右）。前回の南イタリア・シチリア研修で見学したポンペイ遺跡で見た医者の家は、ギリシア神話の健康・医学の神のシンボルである蛇の絵が飾ってあったことを思い出した。ガイド氏から「蛇」マークが薬局の印である説明を聞いているとき、近くにあった赤く塗った郵便ポストに利用者が来た（写真下左）ので、思わず写真を撮ってしまった。この郵便ポストには集配時間が記されていない。その理由は、時間どおりに郵便物を集めないと告訴される恐れがあるので、時間が記されていないと、ガイド氏が説明してくれた。日本のポストに郵便物の集配時間が記されているのは、日本人がそこまで時間にうるさくないからなのか、それとも日本の郵便の集配業務がきちんと行われているからなのかと思いながら、この説明を聞いていた。

マーチャーシュ教会は、現在、修復中で、残念ながら有名なフレスコ画は見ることはできなかった。ハンガリー王国の建国者イシュトヴァーンは、ハンガリーが周辺のヨーロッパ諸国とは民族が異なるなかで、周りの国々と共存するためキリスト教に改宗したという。マーチャーシュ教会の横に立つイシュトヴァーンの騎馬像は、二重の十字架





を手に高く掲げている
(写真上左)。この二重の
十字架はハンガリー国王
という国内統治権とハン
ガリー大司教叙任権とい
う二重の権力をローマ教
皇から与えられた象徴で

あるとされる。このイシュトヴァーン像の前に観
光用の鷹匠(写真上)がいた。鷹匠の服に三重の
十字架。キリスト教と縁の遠い世界に住んでいる
私には、二重の十字架や三重の十字架は珍しい。
なお、三重の十字架は教皇十字架とも呼ばれ、ロ
ーマ教皇の典礼、儀礼の際に用いられる横軸が三
本ある十字架である。

三位一体広場のまわりにある回廊展望台(写真
上右)は、漁夫の砦とよばれる。漁夫の砦は、王
宮の旧城壁を利用して1896~1905年にかけて建
設されたのが始まりという。その呼び名は、ドナ
ウ川の漁師組合が城塞のこのあたりを守っていた
こと、また、このあたりに魚市場があったことな
どから名付けられたものと説明された。第二次世
界大戦後、戦争で大破したマーチャーシュ教会を
改修した建築家シュレックが、白い石灰岩を用い
てネオロマネスク様式で、マジャール人の7部族
を表わす7つの尖塔をもつ回廊展望台として建造
したのが漁夫の砦である。ここからドナウ川を挟
んでの眺望はすばらしく、ブダペストの町並みが
眼下に広がっていた。第二次世界大戦では、独ソ
の攻防で王宮や鎖橋さえも破壊された、激しい市

街戦の戦場となったブダペストの町である。王宮
やマーチャーシュ教会の再建ばかりでなく、ブダ
ペストの町の美化のために漁夫の砦を建造したと
される。社会主義国ハンガリーの町作り政策に非
常に興味が湧いてきた。それは、1956年の「ハ
ンガリー事件(動乱)」の背景になったハンガリ
ーの経済状況が、悲惨だったと理解しているから
である。

社会主義ハンガリーの町作り

それと関連して、ハンガリーの現地ガイド氏は、
「社会主義」時代に建築した住宅の外壁の厚さが
20~30センチと薄いことを何度も強調してい
た。比べて見せてくれた住宅の外壁は、厚さが1
メートルもある。薄い外壁では、暖房の効率が悪
く、冬は寒くてだめだという。現代住宅では断熱
材が良くなったので、やたらと外壁を厚くしなく
ても温かい住宅ができるといわれている。「社会
主義」時代に建築した住宅では、断熱材はどのよ
うに使われていたのだろうか。

ガイド氏は、「社会主義」時代の悪口を言っ
ていたのが、ガイド氏の親は外交官で、ガイド氏
の上手な日本語は、彼が日本の中学に通学し生活
のなかで身につけた言葉だからという。しかし、外
交官は一国のエリートとして「社会主義」時代の
上層部の一員だったはずなので、過去を懐かしむ
ことはあっても「社会主義」時代の悪口を言うの
は本心なのかと、疑問に思えてならなかった。私

は、ガイド氏が自由化後のハンガリーで保身をはかるため、あえて「社会主義」の悪口を言っているように思えた。

英雄広場の英雄たち

ハンガリーの建国1000年を記念して造られたブダペスト最大の広場が英雄広場である。その中央に、ハンガリーの建国伝説で言われる大天使ガブリエルの像を頂く記念碑（写真右）が建っている。大天使ガブリエルは、伝説ではローマ教皇にイシュトヴァーン1世に王位を授けるよう告げたという。この大天使ガブリエルは、聖イシュトヴァーンの王冠と大主教十字架を握って立っている。記念碑の左右には歴代の国王や将軍、芸術家などハンガリーの英雄たちの像が建っている。まさに英雄広場である。「ハンガリー事件（動乱）」で有名なナジ・イムレ元首相が死去したとき、この広い広場に、その死を悼んで25万人もの人びとが集まったと言われている。

英雄広場の裏手に広がる市民公園は、1km²の面積をもつ大公園である。その中に有名なセーチェニ温泉がある。ヨーロッパの温泉は飲泉が主流で、日本人が思い浮かべるような浴場施設がないところさえある。しかし、温泉の多いハンガリーは入浴もさかんで、セーチェニ温泉は、スケールも大きく、施設の外観は宮殿のように見える。この温泉施設が公衆浴場だとは、実際に建物を目の前にしても信じられない思いがするという。この温泉から流れ出たお湯が英雄広場の隅の下水口から湯気をたてていた。

ハンガリーではフォリントに両替えせず、ユーロだけで過ごしていた。案内された土産物店

英雄広場の記念碑



では、ユーロも使えるとのことで、フォリントの持ち合わせはなくとも民族工芸品や貴腐ワインを買うことができた。

このまま推移すれば、ハンガリーもユーロ圏に移行するかもしれない。しかし、ユーロ圏の一面、ギリシアの財政危機では、EU内の経済大国がギリシアの経済政策に規制を求めたこと——特に賃金や社会・福祉政

策の大幅引き下げ策を求めたことからギリシア国民が反発し、一時、ギリシアはユーロ圏から離脱寸前にまで至ったことは、印象深い。国民の権利が、国民の意思によらずに制限されることと、便利さのどちらをとるか——本当はもっと多面的な問題であるけれど——ハンガリー国民がどう判断するか、おおいに興味を引かれている。ブダペストからウイーンへのバスでは、夕日が地平線に沈む景色に見とれてしまった。（写真下）





ブリューゲルやクリムトに会う

11月4日、中欧四ヵ国旅行の最後の見学地がウィーンである。その最初の見学先は、ハプスブルク家の夏の離宮であるシェーンブルン宮殿であった。「あまり混まないうちに」ということで朝一番の見学になったが、宮殿前の道路は、既に観光バスでいっぱい。前回、このシェーンブルン宮殿を見学したときには、召使いの仕事部屋や仕事のような展示が記憶に残っていなかった。二度目の見学だと、だいぶ注意が行き届くということであろうか。ただし今回も、第二次世界大戦中に爆撃を受けたあとを修復した天井のフレスコ画と周囲の元からあるフレスコ画との違いについては、やはりよく分からないままであった。私の鑑識眼のなさが恥ずかしい。

シェーンブルン宮殿（写真上）の見学で一番驚いたのは、見学者に開放していない上の階を、公務員用の宿舎として有料で賃貸しているということである。日本で言えば、京都御所とか桂離宮の一部を公務員宿舎にしている感覚であろうか。

ホーフブルク王宮の前に建っている美術史博物館では、ブリューゲルやデューラーなどの有名な絵画を、美術が専門という現地ガイドの在留日本

人女性の案内で、ゆっくり見学できた。おかげで図版などで見知った有名な絵画を解説付きで見学し、知らなかったそれらの絵画の隠された見所を知るなど、知識を深めさせてもらった。驚いたのは、展示室でそれらの有名な絵画を自由に写真にとってもよかったことである。美術館二階の食堂の外には、クリムトの壁画がある。今年はクリムトの生誕150年で、近くから壁画が見られるように仮設のプラットホームが造られていた。

この美術史博物館の展示物は、古代から現代まで幅広くある。古代の美術品のなかにはエジプトのものもあったが、こちらの展示室は、見学者があまりおらず、ゆっくり見学できた。

午後の見学は、クリムトの生誕150年を記念した展示を行っているベルベデーレ宮殿である。クリムトは友人の画家たちと互いに影響し合うことで、時とともに画法を変化させたという。美術に詳しい現地ガイド嬢の案内で、クリムトの絵画の成長について、実物を前にゆっくり説明してもらった。クリムトの絵画についての認識が改められた思いがする。なお、ベルベデーレ宮殿では、展示室内での撮影は許されていなかった。美術史博物館が例外ということであろう。



カプツィーナ教会

ハプスブルク家の墓所

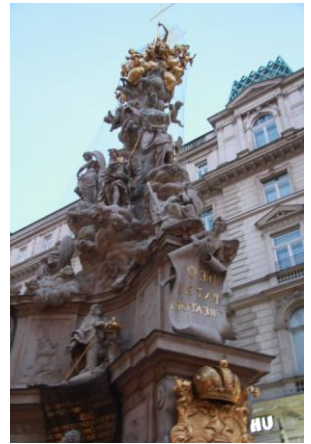
午後の残り時間は、自由時間でウィーン市内の散策を行った。添乗員さんは、シュテファン寺院などに行きたい人たちを案内するという。私たちは、村木さんの案内で、歴代のハプスブルク家の墓所であるカプツィーナ教会(写真上左)に行った。私は二度目の訪問だったが、カプツィーナ教会が観光施設として整備されていたことに驚かされた。地下墓所への入口が、教会前広場に面して設けられ、明るい入場券売り場には女性の職員がいて、入場者に対応していた。墓所の管理をするのは、カプツィーナ教会の修道僧で以前と変わらないとのことだが、以前来たときには、入口を入ると薄暗い廊下であった。そこに修道僧がいて地下墓所への入場希望者から入場料を集めていたと記憶している。当時は、その薄暗い廊下に地下墓所に入る入口があって、そこから地下に降りていった。今は地下墓所のなかも明るく、広く整備されていた。あの狭い敷地のなかで、地下墓所を大きく広げたことにも驚いた。そして昨年7月に亡くなった、かつての皇太子であり政治家として活動したオットー・ハプスブルクが、レギーナ夫人とともに、ここに埋葬されている。ハプスブルク家とカプツィーナ教会との現在に続く深い関係を実感させる地下墓所である。なお、1654年から1878年までに世を去ったハプスブルク家の人々の心臓は、アウグスティーナ教会の心臓保管室に安置されていると、旅行案内に書かれている。二度

も見学しに行って、こういうのも変だが、遺体が入っている棺を他人に見せたり、心臓だけ取り出して別に保管するような感覚に、私は違和感を覚えている。

次に行ったシュテファン寺院は、夕方ではあるが日曜の礼拝が続いていた。一般の観光客を礼拝参加者から分離する鉄柵がある。鉄柵の中は信徒席で、カトリック信者はその中に入って礼拝に参加していく。カトリック教徒だと言い、十字を切れば入れてくれるようだが、私はカトリックの十字の切り方を知らない。もう薄暗くなってきたし、次の予定もあるので、塔に登ることは断念した。

有名店が並ぶグラーベン通りを経てカフェ・ザッハーに行くことになった。グラーベン通りの途中にあるこのペスト記念柱は、1679年に黒死病がヨーロッパをおそい、ウィーンでも死者が10数万人にものぼったが、それが終息した時に、時の皇帝レオポルト1世が、神のご加護に感謝して、建立したものである。1682年に建設がはじまり、1686年に完成した、バロック時代の代表的彫刻のひとつといわれる。今回の旅行先では、各地で幾つかのペスト記念柱を見た。当時のヨーロッパでは黒死病が大きな恐怖を人びとに与えていたことを体感させるものであった。

ペスト記念柱
ペストを突き落とす天使の彫刻



ウィーンの街の観光は

この日の最後は、コンサート。会場は元は貴族の館とのことだが、観光客相手の会場である。クラシックコンサートと旅のしおりには書かれてい

るが、京都の「ギオンコーナー」のように、ひとつの舞台で様々なジャンルを一度に楽しめるように企画された「コンサート」だった。ピアノや弦楽カルテットや男女の歌手による歌曲やダンスなど、これはそれなりに楽しいコンサートだった。

しかしウィーンの観光でホーフブルグ王宮にこだわるのは、シェーンブルン宮殿は夏の離宮であり、本宮はホーフブルグ王宮と思っているからである。このホーフブルグの王宮宝物館には、神聖ローマ皇帝の帝冠（962年頃制作）、オーストリア皇帝の帝冠（1602年制作）、金の羊毛騎士修道会の宝物、一角獣の角など有名な宝物が集められている。その他、宮廷の銀器コレクションもあり、豪華な祝宴の模様やディナーのデコレーションなど、当時の宮廷生活の多彩な側面を見ることができるという。また、ホーフブルグ王宮でのフランツ・ヨーゼフ1世とエリザベート（シシイ）の生活ぶりを見ることができる展示もある。

要するに、ホーフブルグ王宮は見所がいっ

ぱいの見学場所だが、今回のウィーン旅行では、残念ながら行けなかったということだ。

その他に、ホーフブルグの新王宮の中世武器博物館、古楽器博物館、エフェソス博物館、さらにスペイン乗馬学校も一度は行きたいところで、ウィーンのスペイン乗馬学校は、世界唯一の施設として、ルネサンス時代に集大成された古典馬術の最高技術を保存し、今日もなおそのオリジナルな演技を披露していることで知られている。だから、ウィーンだけでも一週間あっても足りないくらいの町なのだと思う。

最後に、オーストリア西部にはアルプス山脈の地域がある。山と湖の土地で、ザルツブルクの音楽祭にも、一度は行きたいものである。また、ハンガリーは、騎馬民族の伝統を残した草原地帯がある。今回の旅行を足がかりに、大自然に囲まれた土地にもゆっくり行ってみてみたいものである。

「不易と流行」~~~~~講演と授業実践

全歴研第53回研究大会に参加して

村木 逸子

平成24年8月1日から3日まで東京・早稲田大学国際会議場を会場として開催された。初めて参加したのが何十年も前のことだが、基本的には変わらない風景が展開されていることに感心したり呆れたり……。ある教員の弟子の教員、そのまた弟子……と連綿と続いているケースもあって戦後60数年、平和国家日本を再発見したが、マンネリズムは隠せない。何か新しいものはないのだろうか、と分科会にそれを求めた。

1 講演 「世界史教育の在り方をめぐる諸論点と今後の展望」 岸本美緒氏（お茶の水大学教授）

かの有名な「山川世界史」の現在の執筆者であ

る。いかに特色ある教科書を発行しても、やはり受験にはこの教科書が……と私の高校時代からいまだに続いている教科書に何か新しい要素を取り入れているのだろうか、と耳を澄ませて聴いてみた。概要は次のとおり。

＊＊

歴史教育は何の役にたつか、なぜ世界史が必修なのか、暗記中心、憶える事項が多すぎるのではないかなどの声がきかれる。マルク・ブロックは「歴史のための弁明」で「歴史は読み書き・算数と異なり日常生活に必要な実用知識でない」といっている。中国の儒学では歴史を「社会をよくしていく責任ある階層が統治に役立てるために学ぶ人間の経験」としている。

しかし、現在の日本は、「主権在民」の国家であ

り、建前上は全ての国民が一定の判断力をもち政治参加できることが必要とされている。グローバル化のすすむ現在は、この時代の判断力を培うために世界史の知識は必須なものである。歴史研究者は、**歴史を学ぶことにより現実の問題に対して正しい判断力ができているか**について考えるべきではないか。

私の考えでは、日本人は戦前にくらべ、他文化理解ができ相対化してものごとをみることができている。「健全な懐疑主義」が育っていると考える。歴史学習で個々の細かい人名や事項を憶えて何の役にたつかといわれるが、忘れてもよいと考える。一度やっておかないと大体の感覚もわからない。勉強して忘れるのと勉強しないのとは異なるわけで、大体の感覚をつかめればよい。

小川幸司氏は「歴史学研究・増刊号」(2009 年 11 月)で「世界史を学ぶという苦役への道は世界史教師の善意で敷き詰められている」と述べているが、ではどうあるべきか。

歴史教育の歴史を辿ると、かつて(1950 年代であるが)あまり細かいことにこだわらない世界史の教科書もあった。そこで示されたのは羅列ではなく脈絡重視、事項の説明を丁寧に、歴史の多様な見方を示すことなどであり、これが授業のなかでできればよいのではないだろうか。考えさせる問題を授業で取り上げるとしても無理に考えさせる必要性はないと思う。授業のなかで整理・論述のしかた、調べ学習、文学・絵画資料の読解などをする。ほかにも知識を動員してクイズ、仮装イベント、現代的課題についての討論などもあろう。判断力については、与えられた情報のみで判断するのではないことを資料批判などで育成できる。

歴史教育における思考力育成についてだが、知識だけでなく思考させる授業の工夫は色々あるだろう。日本の歴史教育では固有名詞の暗記の部分が多い。アメリカではテストにおいても思考力を育成するような出題である。

調査・整理・分析・発表(調べ方・まとめ方)のスキルが上手か下手かなどの観点も必要である。生き方、生きる姿勢の育成は、歴史的事象をとり

あげて自分にどう関係する問題かなどを考えさせるとよい。

授業において、思考力を育てるには生徒たちの教師への信頼感が大事ではないか。歴史に様々な考え方があるのを知るのには「これが正しい」と真剣に主張する人々の姿から学ぶのではないか。私は、カトリック系の学校で学んだが、宗教改革の授業でシスターが「対抗宗教改革」の正しさを真剣に語る姿から様々な考え方があることを学んだ。

今後の展望であるが、世界史選択者の減少は下げ止まるかについての答えは、負担を軽減することによって選択者は増えるかということではない。世界史教育はドラスティックに変わるか、漸次的改善か、を問われれば後者である。

2 世界史分科会「ICT機器による世界史の授業実践」 鈴木高志氏(都立小平高校)

東京都では 2008 年度全都立高校に学級数分の ICT 機器を配布した。それはいったい何ぞやという Information and Communication Technology の略で、移動できるようにキャスター付きのカートに、タブレットパソコン、プロジェクター、DVD ドライブが入り、そこに電子情報ボードがついているものだそう。

この日の発表者は、教員になる前「学習塾業界」にいたということで、授業の方法、授業評価などにユニークさがあり、新しい教員の姿を感じた。

授業はパワーポイントなどのプレゼンテーションソフトをつかって提示することを基本とした授業をおこなっているという。その授業形態にとって必要なのは単なる図版や紙に書かれた資料では不十分で、デジタル地図、デジタル写真、デジタルデータが欲しい。しかしそれらが乏しいので自分で作成していると、次のように報告した。

デジタル教材の作り方

(1) 写真 自分で海外旅行などで撮影してきた写真が望ましいが、それでは限定されるのでインターネット上にある写真を活用する。授業において使用することは著作権法の例外規定により問題

アメリカ合衆国の歴史教育 から何を学ぶか

—思考力育成型教授法の意義—

東女大教授 油井大三郎 先生

12月22日(土) 於都立石神井高校

ないと思うができるだけ出典は示している。写真は人間も写っているものを選び、生徒の関心を呼び起こす。海外旅行の写真はよく利用する。

(2) 資料のデジタル化 いわゆる「自炊」という方法

方法としては、まず「教科書」や「世界史資料集」などを全部裁断する。(中国製の優れた裁断機があるという) 次に、その紙片を一気に入れることのできる「ドキュメントスキャナー」を使う。これは大変便利である。こうしてできたデジタル化された資料や地図をPDF化してスクリーンに映す。生徒が使用している教科書以外の教科書、資料集など利用すると授業にも広がりがある。歴史地図の教材化などは大変役にたつ。

(3) 動画 授業には動く教材も欲しい。山川出版社「ムービー世界史」シリーズは非常に優れており、是非備えておきたい。しかし、それだけでは不足であり、YouTubeなどの動画サイトから入手したものも授業につかっている。

「Craving Explorer」などのフリーソフトを使用すると、WMV形式でのダウンロードが可能であり、パワーポイントなどとの相性もよい。

興味を持たせる方法

＊家庭学習で、映画を見ること(月に1本)や読書(月に1冊)を課しレポートを提出させる。

色々なことにイメージを膨らませるように講座の「ツイッターアカウント」をもち、授業でふれられなかったエピソード、見てほしい映画、インターネットのサイトの案内も設けている。

＊授業で使うワークシートとアンケート

塾での経験を生かし、毎時間固有名詞、年号などを記憶させるようなワークシートを使用しているが、その最後に必ず感想、リクエスト、質問を書かせている。コメントを書いて返却している。生徒の意見などは次の授業のヒントを与えてくれることもある。

＊

まさに「不易と流行」。じっくり考えさせたり資料批判をしたりする授業と、最先端の授業機器の駆使による授業と…。私は後者が大変面白かった。

油井先生は現在日本学術会議会員で、高校地理歴史科教育分科会委員長であり、委員会は、2006年秋の世界史未履修問題を契機に「歴史基礎」、「地理基礎」を新設し必修化する提案を2011年春に行いました。更に、教授法は従来の知識詰め込み型から思考力育成型へ抜本的転換を促し、「歴史基礎」は、近現代史に重点を置き、主題学習を加えた科目とすることを提言しています。

アメリカ合衆国では、新移民のアメリカ化や開放黒人の市民教育のために、1916年に社会科(Social Studies)が創設されました。アメリカでの歴史教育は、社会科タイプと通史教育タイプに別れ、社会科的歴史教育が主流となり、主題学習や自主調査やグループ討論が重視されました。例えば、小学校では黒人史が必修となり、ディベート中心の授業が行われています。高校の場合では、エノラ・ゲイ号の原爆投下による被爆品の展示について、賛否の討論が行われ、その後各自がレポートを提出するといった授業例をNHKTVが報道し、そのディベート学習のビデオを見た日本の学生は驚いていました。その討論の前提となる単元の設問が、日本の歴史教科書には殆ど見当たりません。

今後の課題は、世界史未履修問題の一因ともなった系統的知識詰め込み型歴史教育から、グローバル化時代に相応しい思考力育成型歴史教育に転換を図り、自主調査やグループ討論やプレゼンテーション等の楽しい体験から歴史好きの生徒を増やすことだと思います。

(記 豊田岩男)

アジア・太平洋戦争の開戦は なぜ回避できなかったのか

—明治憲法体制との関連で—

—橋大教授 吉田 裕 先生

6月15日（土） 於都立石神井高校

要旨 開戦・敗戦に関する様々な議論がある。「失敗の本質」（経営学者＋防衛専門家）がビジネスマンを中心によく売れている。戦中派の減少とともに、あの戦争が何だったのか、という切実な問いが消滅しつつある。明らかに無謀な対米開戦にいたる経緯をよくつかむべきだ。

■ **日米双方の判断ミス** 日米との関係で決定的な対立はなかった。日英対立はあり、民間でも反英運動はあったが、反米はなかった。にもかかわらずなぜ戦争は回避できなかったのか。対中関係は、日本側では日中に限定したいが、中国側は国際関係に広げたかった。日米開戦は中国外交の勝利という面を持っている。

また、日本海軍の中の開戦派の存在も注目すべきだ。対英米戦になると海軍予算が増大するという。台頭する南進論のなかで、日ソ不可侵条約が締結されるが、これはソ連の中国援助が止まるという効果をもたらしている。松岡洋右は、日独伊ソの4国協商を模索した。

日本は、いくつかの判断ミスをした。南部仏印進駐してもアメリカは黙認するだろう、と考えていた。アメリカも判断ミスをしていた。日本の経済の脆弱性を過大にみていた。制裁をすれば、日本の中の穏健派が発言権をまし、振り子が元に戻るだろうと考えた。駐日大使グルーもそういう分析。振り戻しが無いまま、戦争突入。日本の軍部の見通しは、イギリスの崩壊、ドイツの勝利を前提としていた。しかし、イギリスは耐え、独ソ戦が始まり、日独伊ソ協商路線は破たんした。

その後、4回の御前会議で国策・開戦が決まっ

て行く。

■ **開戦決定はどの段階か** どの段階で開戦が決まったかは、研究者で見解が分かれる。9月6日説：外交交渉の期限を切った。但し、天皇、側近が動揺している。11月2日説：天皇、側近も決断。12月5日説：東京裁判の弁護団。ハルノート重視。しかし、ハルノートにも問題がある。外務省編の史料集には、Tentative and Without Commitment（試案であって拘束されない）の1文が削除されている。最後通牒の遅れと言われるが、じつは最後通牒になっていない。単なる外交交渉打ち切りをみの通告でしかない。ただ、ハルノートはすべての逡巡派を踏み切らせた意味はある。機密戦争日誌には、「帝国の開戦決意は踏切り容易となり、めでたしめでたし」とある。日米交渉がもう少し長引けば、局面が変わる可能性があった。

■ **明治憲法体制の欠陥** 12月8日は、ドイツ軍がモスクワ攻略をあきらめており、日本の戦略の前提が崩れる可能性があった。海軍首脳や、天皇、側近も最後までためらいがあった。それでなぜ、開戦が避けられなかったのだろうか。それは、明治憲法体制のなかに問題があったのではない。ひとつは、統帥権の独立といわれるが、国务大臣が輔弼しなくていいとは明文化されていない。本来は輔弼が基本だろうが、輔翼の立場にある統帥部の権限強化が実績の積み重ねにより、ブレーキが利かなくなった。ハルノートの china とは、満州を含むかどうかは分からない。それを確認することもなく開戦に突き進んだ。

明治憲法体制では、あらゆる面で、政治システムが分立していた。軍の内部にしても、参謀総長や、軍令部総長が命令権をもっていたわけではない。制度設計としてチェックアンドバランスの構造があった。この結果、政策決定過程において、リスク、ためらいを感じても、強力なリーダーシップが発揮しにくく、強硬派を抑えることが出来ない。明治憲法の立憲主義的側面の評価ということが言われるようになっているが、開戦問題から見ると、むしろ欠陥が浮き彫りになる。

（記 小澤拓美）

都歴研友の会企画

川越研修の記

～その中世から近代への歩みを訪ねる～

小澤拓美



友の会初の日帰り研修として、2013（平成25）年5月10日（金）に川越に行きました。テーマは、＜川越～その中世から近代の歩みを訪ねる～＞としました。参加者は11名で、小澤がドライバーと案内役を務めました。

本川越駅及び川越駅を集合地点として、トヨタハイエースコミューターを駆って、まずは中世の河越館史跡に向かったつもりが、道を間違え、東京国際大学に。ここまできたらと、横道に入つて的場（まとば）古墳群の牛塚古墳を車窓から見学しました。的場六十六塚のなかで唯一良好に残存している前方後円墳です。このあたりは、古代東山道の武蔵路が通っていたようで、霞が関遺跡からさまざまな出土品があり、入間郡衙（ぐんが）に比定されているところです。

ようやく川越館あとの一角、常楽寺に到着。川越重頼（しげより）により建立された持仏堂のあと。重頼は、母が比企尼（ひきのあま）といい源頼朝の乳母をつとめた。その縁で娘は、源義経の正妻として京都に嫁いだのでした。しかし、義経の勢力が崩壊したのち、義父の川越重頼も頼朝により滅ぼされました。この寺では、重頼、娘、義経の慰霊碑を見ました。そこから、足をのびし新

日吉（いまひえ）神社へ。ここが河肥庄（かわごえのしょう）発祥の地です。

ここは、車窓から眺めただけで、国指定史跡の河越館跡に向かいます。今に残る土塁のほか、発掘で見つかった井戸や、建物跡を確認しました。平一揆による河越氏滅亡以降も、上杉の抗争に使われて、山内上杉の上戸（うわど）の陣はこと考えられています。出土した遺跡は何層にも重なり、この地が関東制圧にとって重要なところであることを示します。

その後、入間川を渡り、東明寺（とうみょうじ）に行きました。桶狭間、厳島と並んで日本三大奇襲戦の一つと言われる、河越夜戦の激戦地です。実は東明寺は、中世でははるかに広い敷地を持っていたようですが、この東明寺口の戦いで、北条氏康の関東支配は盤石なものとなったのでした。

そこから、ちょっと車を動かして、川越における現存最古の商家、水村家住宅を見学します。享保年間築の、かつては杉皮葺きの屋根に石をおいた、まさに中世の絵巻にでてくるような民家です。関東でも、最古級の商家だと思います。農家を含めて民家の日本最古は兵庫にある箱木千年家（はこぎせんねんや）だそうです。まあ、実際は室町期らしいですが。水村家に次ぐ古い商家が、嘉永年間の山田家です。現在は、着物屋さんです。着物の＜美人＞男性、山崎さんの許可を得て、チヨウナ削りの柱など見学しました。

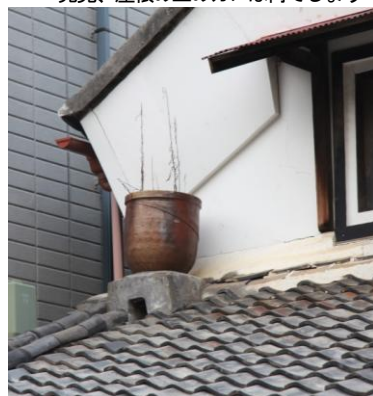
そして、川越市立博物館へ。私が数年前からたびたびお世話になっている名解説員、鈴木さんの案内で、江戸図屏風レプリカ、水村家模型、天海像レプリカ、新河岸水運、新日吉神社の鐘レプリ



河越館跡 土塁、井戸、建物跡など

カ、蔵造り商家の構造等を見学しました。

お腹もすきましたので、林屋（はやしや）でうな重の昼食をとりました。川越



の有名なうなぎ屋は、小川菊（おがぎく）、東屋（あずまや）、いちのやの3軒ですが、あえて開店まもない林屋を選びました。もとは栃木県那珂川で川魚問屋を営む若い社長が頑張っている店です。

昼食後、前田健次郎設計のドリス式コンクリート造りの旧武州銀行、現在の川越商工会議所<国登録有形文化財指定>を見学。

そして、最も豪華な蔵造り商家の原田家で蔵造りの外観を詳細にチェックしました。箱棟、影盛（かげもり）、観音扉、ツブ、折れ釘、目塗台（めぬりだい）、腰巻など。

島崎藤村ゆかりの佐久間旅館は外観のみ。藤村56歳のときに当時32歳の静子さんを2番目の妻として迎え、その実家が川越にあったためにしばしばこの旅館に逗留したのでした。「夜明け前」はここで執筆されたようです。その斜め前に、やはり近代の登録文化財、川越キリスト教会があります。多くの蔵造り商家と同じく川越大火後の建築です。

今日は、閉館だと思っていた山崎家別邸が開いていたので、ラッキー、と見学ルートに組み入れました。ここは、辰野金吾に西洋建築を学んだ安岡勝也が、晩年になって、茶室など日本の伝統建築を研究するなかで設計した建物と庭園があります。埼玉県初の国登録文化財庭園です。まだ市に譲渡されたばかりなので、復元整備はこれからの課題です。3年くらい後に再訪したいものです。

おやつの時間です。茶の亀屋に入り、大蔵（おおくら）で抹茶とお菓子です。こここそ、私が川越で最も好きな場所です。実は誰にも教えたくな

いところですが。時間のある時、ほとんど客のいないこの空間でゆっくり抹茶を楽しむのは最高のぜいたくだと思います。今日は休館日ですが、特別に開けておいてもらいました。

いよいよ、一般的な川越観光メインストリート一番街です。菓子の亀屋（写真上左）→松崎家→安岡勝也の最後の設計、山吉（やまきち）デパート→小林家の烏屋根→国登録文化財の埼玉県1号の旧八十五国立銀行を見て→料亭山屋くもと横田五郎兵衛家別宅→目の前の目塗甕（めぬりかめ）

（写真上右）を見て→瀬戸物の原家2階に上がり観音扉の外を眺める→ちょうど15時となりましたので時の鐘を聞く→唯一の近世蔵造り商家の<国重文>大沢家の特色を見て→戻って亀屋でお菓子のお買いものをしました。

ここでまた車に乗って、改修なった川越城本丸御殿へ。近世城郭御殿は日本で5つしか残ってない、その2つが川越にあるのです。特に本丸御殿としては、高知城とここだけ。室町期と江戸期の御殿の違い、御殿建築の特色など少しだけ勉強。

川越城模型があったので、今日は見られなかった中（なか）の門の戦略的意義なども見ました。版築（はんちく）土塁とか、左袖（ひだりそで）など。あそこを見に行く観光客は「な〜にこれ、ただの堀じゃん」という方が多いのですが、貴重な遺構を前に残念なことです。

そして、本丸前の、三芳野神社へ。建物は、もと江戸城紅葉山東照宮の移築。「行きはよいよい、帰りは怖い」の意味を考えてみます。私の好きな静かな細道を歩いて、天守代用の富士見櫓跡へ。



川越電気鉄道の終点、久保町駅あとを車窓から眺め、日枝神社<本殿は国重文>→喜多院→東照宮→花街あとの風情を味わい→永島家住宅<唯一残る侍屋敷>→南院跡を見て、中院へ。

最後の訪問地、中院では、藤村が静子夫人の母みきさんに贈った茶室<不染亭>（ふせんてい）を見学しながら、菓子<不染>をいただきました。ここは、歴史ある寺院でありながら観光客の喧騒とは無縁、静かで、よく手入れされた庭が楽しめます。

17時ちょっとすぎに、川越駅及び本川越駅で解散としました。ご参加の皆様、盛りだくさんでお疲れになったことと思います。機会があれば、今回の資料も参考に、ご家族・ご友人をご案内して菓子屋横丁だけでない魅力ある川越を紹介していただければと思います。おつきあいありがとうございました。

都定通研の思い出

—歴史関係を中心に—

多田 統一

和59年度から、社会部の副部長として、定年退職の年まで都定通研と関わってきた。最初の部長は、地理の小林高寿氏（新宿・定・教頭）である。それまでは、見学会を中心にした部会であったが、私が若かったこともあり、授業経験交流会を新たに実施し、若いメンバーも集まってきた。関ブロ第30回大会で、私が東京都の定通社会科教育の問題とその対策について発表したことが印象に残っている。

地理の部長が2人続いた後、昭和62年度から、歴史の三條和男氏（四谷商・定・教頭）に部長をお願いした。三條氏が新潟の出身なので、新潟料理の新宿「鍋茶屋」で忘年会をしたことが思い出される。

平成元年度には、部長を増田克彦氏が引き継いだ。若くてダンディーな増田氏は、女性だけでなく男性の部会員からも人気があった。

その後の部長が、飯田國雄氏（九段・定・教頭）である。当時、九段高校は、週5日制を先行実施しており、その情報はとてもためになった。高研連会誌に、社会部の活動成果を掲載できたのもよかった。

地歴、公民部になった平成6年度からしばらく公民科の部長が続いた後、平成14年度からは遠山孝典氏（小石川・定・教頭）に部長をお願いした。研究会の運営スタイルは、従来どおりである。

平成23年度は、私が退職最後の年ということもあり、部長は佐々木義文氏（一橋・通・副校長）を迎えた。佐々木氏は、都の開発委員会の時の私と同じメンバーである。指導体験発表会への地歴、公民部会からの継続的な発表をお願いした。

教員人生のほとんどを、定時制で過ごした。そういう意味で、私にとっては、都定通研は最も核になる研究会であった。そこで出会った人たちは多い。現在、都歴研・全歴研で活躍している野村昌幸氏、風間睦子氏、中家健氏などは、元定通研のメンバーである。生徒が多様化し、さまざまなタイプの学校が出現するなど、定時制の諸課題をひとまとめに捉えることができない時代である。既存の定時制の教員生活が長かった私にとって、生徒を見る目や教育に対する考え方は、そこで出会った生徒たちや教員仲間から学んだことが、その基礎になっているものと思われる。

募集

友の会研修旅行のご案内

日光～紅葉に燃える修験の道を訪ねて～

日光は、長い歴史の中で〔徳川家康の霊廟地〕であることはその一部でしかありません。ところが東照宮にお参りただけで日光を見たと思っている方が多いのは残念なことです。くめども尽きることのない日光の、自然・文化の奥深さをできる限り味わう旅をいたします。大体標高 500m～1500mを移動しますので、いずれかでは最高の紅葉を楽しめるはずです。修験の道も、少しだけ味わう機会を作ります。

日 程 2013年10月28日(月)から10月30日(水) 2泊3日 **宿 泊** 東照温泉

見 学 地 稻荷神社、鉢石、本宮、四本龍寺、旧大楽院、養源院跡、東照宮、二荒山神社、興雲律院、開山堂、日光真光教会、含満ヶ淵、白糸の滝、滝尾神社、大猷院、法華堂・常行堂、慈眼堂、輪王寺宮墓地、星の宿、三仏堂、逍遙園、旧田母沢御用邸、釈迦堂、裏見の滝、中宮祠、中禅寺

参加費用 28,500円 ・宿泊費(朝食2回・夕食1回付2泊) ・現地交通費(レンタカー他) ・拝観料

集 合 10月28日(月) 午前11時 JR日光駅・東武日光駅 **解散** 10月30日(水) 午後3時 ころ同駅

募集人員 最少催行人数 4人 最大参加可能(定員) 15人

申込み先 189-0026 東村山市多摩湖町4-14-13 小澤拓美 7月末日までに申し込み(定員打ち切り)

FAX 042-391-9500 Eメール oz22@beige.plala.or.jp

※ お申込みの方には、8月末までに詳細のご案内を送付いたします。

会員の著書紹介

斎藤源三郎著

「帰国生と共に拓いた教育のグローバル化

一四半世紀を振り返って」

B6判 88頁 郁朋社刊 定価800円＋税
2013年3月10日発行

「異文化受容によって個性をも磨いてきた子ども達 グローバル化社会の求める人材は異文化交流によって育っている。自己の力で特性を伸ばしてきた帰国生の高校受け入れを促進してきた著者の教育体験記」(帯文より)

読みたい方はお知らせください。送ります。(増田)

宮崎正勝著

「世界史の読み方」角川選書 定価1600円

「世界史は各国の歴史の寄せ集めではない。では、世界史の歩みはどのように理解すればよいのか。まず高校世界史Bの細部を大胆に省略。歴史の舞台を「小さな世界史」と「大きな世界史」というステージでとらえて単純化し、さらに人類社会の変動や転換のプロセスを時間軸と空間軸でつなぎあわせてみることで、複雑な世界の流れを時代や地域ごとの道筋として読み取る。歴史の大枠と仕組みを俯瞰的に提示する。大人のための学び直し世界史。」(裏カバーの言葉より)

第7回友の会総会報告

日 時 2013年6月15日(土) 14時から

会 場 都立石神井高校

内 容 1号議案から5号議案まで承認。

次の点を今年度の懸案事項とすることとなった。

1 会計年度並びに事業年度は、現行規定では6月から5月となっている。これは、都歴研の規定に従ったものであるが、少々不自然でもあり、その必要性があるかどうか、4月から3月ではないかどうか検討を要する。

2 これまで、友の会は都歴研に対し毎年5万円を寄付し、今後とも都歴研はそれに期待しているふしがないでもない。が、都教委の研究団体に対する姿勢に変化が見られ、様々な条件下でというものの財政的には以前の状況に戻りつつある。これらのこととも関連し、また友の会の存在を若い先生方に知らしめる手立ての一つとして、実践・研究等に優れた20・30代の先生方に対して「都歴研友の会奨励賞」の設定について考えたい。

3 山形、平泉に続き、友の会にとって3回目となる国内研修旅行は、「日光～紅葉に燃える修験の道を訪ねて～」(2泊3日)を計画する。上掲。

4 今年度の世話人は、前年に引き続き同じメンバーで勤めることになった。

都歴研友の会ホームページ

<http://sky.geocities.jp/torekikentomonokai>

「友の会だより」バックナンバーもカラー写真で。